



山田智彦

オフィスの日曜日

NECO.



フイスの日曜日

山田智彦

集英社

オフィスの日曜日

一九七六年一〇月二〇日 初版印刷
一九七六年一〇月二五日 初版発行

定 価 八五〇円

著 者 山田智彦

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

電話 二三〇一六三六一(編集)
二三〇一六七一一(販売)

印刷所 大文堂印刷株式会社

0095-772059-3041

© T. Yamada, Printed in Japan, 1976

山田智彦エッセイ集＊オフィスの日曜日＊目次

I
9 晩夏の憂鬱

13 サラリーマン生活と創作

23 経済小説三点

26 小説への招待

42 退屈と似通う忙しさ

46 人事異動は川の流れ

49 交通スト始まって春がくる

53 モスクワの万年筆

57 アメリカの日本料理

60 びくともしない戦中派

64 食糧危機への不安

67 弱い人間・強い人間

70 大時計の下

73 暑中の出来事

Ⅱ

79 運命の出会い

86 憧れの女性

89 ラブ・アドベンチャー船の旅

100 女の孤独と男の孤独

Ⅲ

113 日曜日のロンドン

128 グルジャの旅から

143 レニングラードの白パン

147 ネフスキー大通り

155 フローレンスからの便り

161 冬のモスクワ

223	219	200	180
オフィスの日曜日	トビリシの少女たち	煙草売りの少女	葡萄酒と美人と詩人たち

装幀・辰巳四郎

オフィスの日曜日

I

晩夏の憂鬱

私の友人で、かなり贅沢な暮らしをしているS氏が、ある時、何かの話のついでに、ぼくには本当に住宅運がない、とぼやいたことがあった。

そう言えば、なるほどS氏は才能や地位や身のまわりの持物などには恵まれすぎるくらい恵まれているのに、家は借家で、その借家がまた義理にもほめられたしろものではなかった。

家、と言うから、いくらか問題が大きくなるが、例えば、部屋、と言いかえてもよい。S氏の部屋はいかにも貧弱で、氏自身の人となりにふさわしくない。人は、それ相応の部屋に住むことによって、はじめて十分に力を發揮することが出来るのではないか？ 近頃そんな気がしてきた。言いかえれば、自分にふさわしい部屋イコール環境に住んでいなければ、自分の力を十分に出しつくせないし、小説家の場合にはたぶん佳い作品を書けない、ということになる。

そう言いきってしまうのは、少し乱暴だが、作品を生み出した場所と作品とはかなり密接な関

係をもっているのではなからうか。

修業時代の某有名作家が、みかん箱の上に新聞紙を敷いて書いたという逸話などはこの関係をよくあらわしている。何もない殺風景な部屋とみかん箱がその時の作家にはもつともふさわしい舞台装置だったのではなからうか。

もし、彼が赤い絨毯の敷いてある部屋に入れられたりしたら、同じ質の作品を書けたかどうかは疑問である。

昨年末、私は引越しをして、十六年間住み馴れた家から、別の家に移った。もちろん、部屋の感じもまったく異なっている。

前の部屋は、天井はベージュ、壁と床は茶色で、材質は板であった。洋間で、娘のピアノと勉強机の隣に私の机が置いてあった。六畳間なのでベッドを入れる空間がないため、眠る時は畳の部屋へ移った。

新しい部屋は同じ洋間ではあるがずっとモダンな感じになり、天井は白、壁は青い花模様の布張りであり、物入れと入口のドアは薄いブルー。床には濃いブルーの絨毯を敷いて、白いベッドを入れた。カーテンは全体の感じにあわせなければいけないというので、これもブルー。部屋の中に入ってドアを閉めると、まるで青い部屋の中に永久に閉じ込められてしまったかのような感じになる。

ピアノも娘の机も別の部屋に移り、一応この部屋には、起きてから寝るまで誰も入ってこない

ことになったが、そうなるとよけい青い部屋に閉じ込められた感が強い。

ブルーという色は嫌いどころか、好きなので、あえてこういう配色にしたのだが、何日もたたないうちにうんざりしてしまった。おまけに多額の借金を背負い、この借金を永年にわたって返済しなければならなかった。

そのために、気に入らないからと言って、簡単に部屋の模様替えが出来る状態ではない。

原因はまさしくそこにあるのだが、小説を書くペースがすっかり遅くなってしまった。しかも、私は相変わらずこの部屋に寝起きしているのだから、いつまでたってもペースがもとに戻るわけはないのである。

自分の部屋のことを書いたが、いままでに私は仕事部屋を他人に見せたことがないし、今後も見せるつもりはない。

どういうわけか、私は自宅を訪問されるのが嫌いだ。仕事の打合せや、その他さけられない場合でも、最寄りの駅前まで出て行って、喫茶店かレストランを使う。

これは、自分が小説を書いている部屋はもちろん、住んでいる家も、そのまわりも、他人の眼には触れさせたくないという極端な羞恥心のせいである。

出来上がった作品はどんな人に読まれても仕方がないが、まだ出来るかどうかはつきりしないうちに、原稿用紙のちらかっている現場やその周辺を他人に知られたくないのである。

これはおそらく私の小説の書き方と関係がある。私は仕事部屋以外の場所で小説のモチーフを

思いついたことがない。旅行中とか、散歩の途中とか、電車やバスの中などで、何かを思いつくことはある。しかし、この種の思いつきは、たいてい思いつきに終ってしまうことの方が多い。場所柄、落着いて考えを深めるわけにいかないのと、周囲の事物の変化にそうやすやすと順応出来ないためでもある。

だから、頭の中にモチーフが浮かび、それが少しずつ深められ、やがて主題と執拗にからみあって、どうやら新しい作品になり得る可能性が出てくるまでの過程はすべて、私の仕事部屋の中で演じられるわけである。しかも、机に向っていて、原稿用紙に文字を書いている時でなければ新しいモチーフが出てこない。

一つの作品が終りに近付くと、決して新しい作品の構想が浮かんでくる。現在書いている作品が完成しなければ、次作にはとりかからないことにしている。次の作品への興味と期待のために、現在の苦しい作業の苦しい部分が少しずつ薄れてゆくような感じさえする。こういう時は仕事部屋の居心地もよい。

要するに自分の苦しみやいらだち、それに少しばかりの幸福感が、狭い部屋の中に充満しているような気がするのである。そのために机や壁や窓やカーテンは薄汚れているのではないか。こうした眼に見えない汚れを、私は他人の眼に触れさせたくないのである。

この夏は梅雨が長びいたおかげで例年よりも暑い日が少なく、北海道は冷害で、大豆や小豆や小麦などの収穫が心配されている。例年より涼しかったとはいえ、夏の間中東京を離れなかった

ので、八月も末になると、奇妙ないらだちを覚える。

パリに居るT氏から絵葉書をいただいたが、それによると、パリは十一月頃の気候で快適、とあった。

夏になると、大勢の人が避暑に出掛けて、パリには人がいなくなると聞いていたので、十一月頃の気候、には半信半疑の気持が強いが、現在パリにいる人からの便りなので、信じるよりほかはあるまいと思う。

それにしても、私は相変わらず、青い部屋に閉じ込められているのだが、この部屋には冷房装置がない。仕方なく、自然の風を入れよう、と努力してこまめに窓を開けているのだが、生暖かい風さえあまり入ってこぬ昨今である。

サラリーマン生活と創作

ある新聞に短いエッセイを月一回連載することになった。内容は自由で、身辺雑記的な創作余

談から、時事的な社会問題や経済問題などに対するオピニオンのなまでの、その時々々の感興に
応じて書いてくれという注文だったので、それなら、わりに気楽に書けるのではないかと思つて
引き受けた。

たとえ、短い文章でも、書きあげるまでにはそれなりの苦勞をするものだから、私は出来るだ
け引き受けないようにしている。それに、ある年齢に達しなければ、味のあるエッセイは書けな
いのではないか、と私は思い込んでゐる。勝手に思い込んでゐるのだから、他人に迷惑がかかる
というものでもない。

私がそう思い込むにいたつたのは、学生時代に数人の仲間たち（西野谷忠男、大場民夫、小笠原
光博、大隅祐行の諸兄）と村松定孝先生を訪ねてからである。同人雑誌を出すための相談で、当時、
すでに泉鏡花研究の第一人者であり、文芸評論家でもあつた氏が、友人、西野谷忠男の恩師でも
あり、早稲田の先輩でもあつたところから、迷惑もかえりみずに押しかけて行つたのである。

その時、氏が、エッセイ及び随筆欄は絶対にもうけてはいけない、と言われたのが妙に印象に
残つた。理由は年輪を重ねていない人間の文章の味気なさが、エッセイになると隠しようもない、
というようなことだつた。小説や評論にはそういうところがないから、きみたちの若い力をそつ
ちの方向へ向けるように、と氏はわれわれを鼓舞してくれた。

いま思い出しても、氏の言葉は正鵠をついてゐるような気がする。しかし、その時は、私の関
心はもっぱら小説に向けられていたので、他の事柄は右から左へと抜けていつてしまつた。